

満天に、こぼれ落ちてきそうな星がさんざめく。村が眠りに入った夜、ランプの明かりが一つ、二つと集まってきた。明かりは15個になり、野外の木の樺に立てかけられた小さな黒板の前で止まった。

ネパール東南部のジャナクプール市近くの村。サリーをまとった女性たちが、ランプを取り囲んで座る。17歳の女性、ニルマラ・サハさんを教師にした夜の識字教室だ。全員がネパール語と算数を学ぶ。

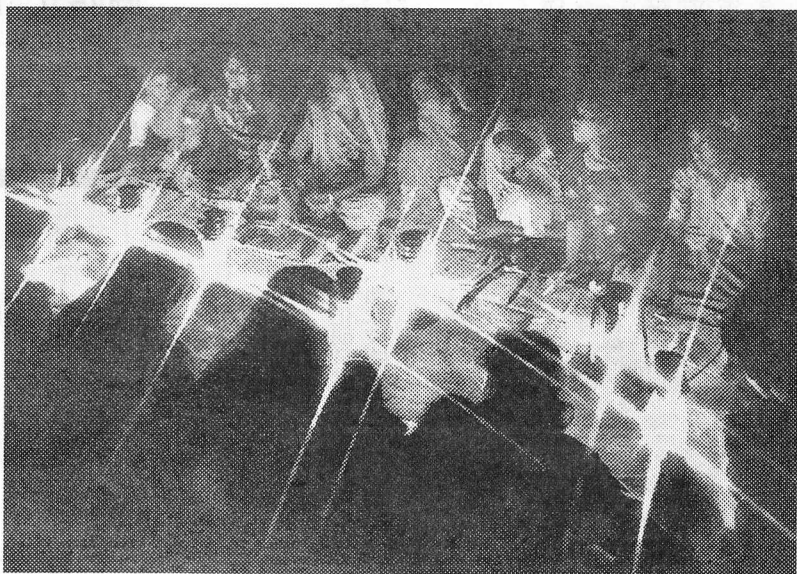
最年少の13歳の少女の横に、最年長のガンギア・デビ・サハさん(35)が

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

いた。表情は真剣そのものだ。初めて字を習うからだ。ガンギアさんは雑貨店を経営している。勉強のおかげで、帳簿をつけられるようになった。「これまで記憶が頼りだったから、目が輝く。」

「夜の識字教室」 広がる世界



4人兄妹の3番目に生まれたが、ものごとがつく前に、両親は相次いで亡くなった。農地を相続した次兄の家に、2歳年下の妹と一緒に引き取られた。農作業に来る労働者のために食事を作ったり、家畜の世話をする毎日。日の出から夜10時まで働き、たまに外

暗やみをランプの灯で照らしての野外教室。35歳で初めて字を習った女性も……—ネパール・ジャナクプール近くの村で



で遊ぶと兄嫁がしかる。親の愛情に飢えて育った。学校には行けなかった。18歳で兄が決めた10歳年上の夫と結婚、この村に来た。子どもを4人産んだが、2年前、夫が別の女性のもとに走り、長男(15)と長女(14)を連れてインドに行ってしまった。雑貨店と

二女(8)、三女(2)が、ガンギアさんに残された。二女も、識字教室と同時開始した朝の子供教室で勉強中だ。「何を習ったかを毎日、家で教え合っています。悔しいけど、娘の方が学ぶのが早い」。ガンギアさんは今、楽しくて仕方がない。一人で店をやっていく自信もできた。

その笑顔が、ふと曇った。夫は時々、気まぐれに帰ってくる。その度に「学校なんか通って何になる。やめろ」とけなす。連れて行った長女も学校に通わせていない。

ネパール女性の成人識字率は11%(1990年)。男性の37%に遠く及ばない。読み書きができなければ、どうやって知識を手に入れるのか。子どもが病気になったとき、守る術をどうやって学ぶのか。

「読み書きができるようになって、世界が広がりました。この喜びを、長女にも味わわせてやりたい」。ガンギアさんはこの願いをかねえたいと、強く思う。

つづく

文・連見 新也
写真・懸尾 公治

35歳で初めて字を習う女性

● 病院建設にご協力を 「目に見える援助」を実施するため、今年のキャンペーンは従来国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地に進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)